話題

ISORD-10 印象記

片岡 憲昭^{*1}

1. はじめに

2019年7月16日～18日の3日間でISORD-10 (10th International symposium on radiation safety and detection technology) が中国・太原市で開催された。ISORDの開催場所として太原市では第3回、第7回に続いて3回目である。この会議は中国・韓国・日本が主として参加するアジア圏の放射線安全技術研究会で、およそ300名の研究者や技術者が集まり、115件の口頭発表と128件のポスター発表が行われた。日本からは8件の口頭発表と4件のポスター発表があった。中国核工業集团公司のZiqiang PAN氏からの開会の挨拶の後、11件の招待講演が行われた。オープニングセレモニー後の講演でIRPA (国際放射線防護委員会) 会長のROGER氏は、将来における放射線防護に関するコミュニケーションの必要性を述べ、若手研究者間で国際的ネットワークの構築をすべきと訴えた。そこで、今後の方針として保健物理分野の国際会議では若手研究会 (若手研) のセッションを必ず盛り込むように要請した。この会議でも若手研究者同士が発表しあう若手研セッションが設けられ、別途、日本・韓国・ベトナムの若手研究者を招いて若手フォーラム (Young scientist forum) が行われた。

2. 若手フォーラム

2018年にIRPAの枠組みにおいて、放射線防護や関連分野の研究及び技術的業務に従事する若手を対象にした国際的ネットワーク (IRPA-YGN: IRPA Young Generation Network) が創設された。IRPAは若手を奨励することの重要性を認識しており、これを推進する要素のひとつに若手会員間のネットワークの創設を挙げている。その一環として、アジア圏の放射線防護に携わる若手研究者の

ネットワークを構築するべく、主催のCSRP (中国若手放射線防護委員) 5名はアジア各国 (韓国・ベトナム・日本) の若手研究者の代表1名をゲストとして招集し、下記のテーマで若手フォーラムを開催した。

①各国の若手研の紹介

②若手における放射線防護のミッションについて

③今後の交流について

各国の若手研に関する情報を第1表に示す。韓国では、研究者や技術者の他に医療従事者が所属しており、勉強会を開催するときのテーマを1つに絞ることが困難であることが挙げられた。各国では開催しているのは勉強会のみであり、日本で行っている公衆理解への活動や暮らしの放射線Q&A活動、他学会との共同勉強会などは行っていないためアウトプットを課題としていた。他国の若手研は近年に設立されたため、成熟した日本をお手本にするという案が挙げられた。

また、予算についても言及された。日・中・韓では母体からの予算が割り振られているが、活動費としては足りないため政府や研究機関に別途予算を要求している。また、ベトナムでは若手研究者への予算はないため自力で予算を確保しており、フィリピンやタイなどのIRPA非加盟国でも大きな問題になっていることも言及された。

今後については、2019年12月4日に仙台で開催される国際若手勉強会のJoint-Work-Shopに参加しようとの声が上がった。さらに、IRPA15についても参加したい若手研究者が多く、予算の都合がつけば若手のワークショップでの交流を望んでいる。しかし、現段階では学会に関する情報が少ないため若手でE-mailのデータベース化が課題となった。今ではIRPA-YGNの委員から各国の若手研に情報が流れる仕組みであるが、若手研を設立していない国やIRPA非加盟国への情報共有を行う必要がある。

今までメールのみの交流を行っていた若手研究者とのFace-to-Faceのワークショップは非常に刺激的で楽しめた。ベトナムから出席していたLE. Ngoc. THIEM氏は飯本先生 (東京大学国際原子力専攻) にお世話になっており本若手研究会員の嶋田和真氏 ((国研) 日本原子力研究開発機構) とも交流があった。また、オブザーバーとして出席した中国の学生も飯本先生にお世話になっており、国際連携を進める上で若手研独自で進めていくのではなく、各先生方が作ったコミュニティーを良い意味で利用することも重要だと感じた。

Noriaki KATAOKA; Impression of ISORD-10.

^{*1} (地独) 東京都立産業技術研究センター; 東京都江東区青海2-4-10 (〒135-0064)
Tokyo Metropolitan Industrial Technology Research Institute; 2-4-10 Aomi, Kouto-ku, Tokyo 135-0064, Japan.

Corresponding author; E-mail: kataoka.noriaki@iri-tokyo.jp

第1表 日本・韓国・中国の若手研究会の情報

	会員数	設立年	上限年齢	職種	勉強会頻度
日本	48	1987	40	研究者, 技術者, 放射線技師, 学生	年2, 3回
中国	76	2018	45	研究者, 技術者, 放射線技師, 学生	年2, 3回
韓国	70	2017	45	研究者, 技術者, 放射線技師, 医者, 看護師, 薬剤師, 学生	年3回

3. 若手サイエンスセッションと学生セッション

若手サイエンスセッションは韓国2件, 中国11件, ベトナム1件, 日本1件の技術発表が行われた。発表内容は, 放射線利用, ドジメトリー, 放射線輸送計算, 放射線遮へい, 環境放射能, 安全管理と多岐にわたっている。学生セッションも韓国3件, 中国15件, 日本3件であり開催国の参加者が目立っていた。

前回, 太原市で行われた ISORD-7 では口頭発表の 1/4 が当日キャンセルとなったが, 今回はキャンセルが少なく, 多くの方が口頭発表していた。一方, ポスター発表はすべて口頭発表の裏で行われ, 口頭発表の同セッション時間が重ならないように工夫されていたが, 実際にポスター会場に行ってみると人は少なかった。特に, Radiation Detection Technology and Application & Radiation Dosimetry の口頭発表セッションは多くの方が聴講していたため盛り上がっていたが, 同時刻のポスター会場は参加者が少なく終始静まり返っていた。ポスター発表の責任時間に出席する担当発表者も少なく, 特に中国人のポスター発表者はほとんど出席していないようにも見えた。せめて Tea break の時にポスターセッションを設けてもよかったかもしれない。

4. 最 後 に

プロシーディングスは学会の当日にアブストラクトと

一緒に冊子として配布され, PDF ファイルもメモリーカード付きで配られた。次回, ISORD-11 は 2021 年に韓国(釜山)で行われる。

中国への出張は今回が初めてであり, 周りからアドバイスを聞くと「飛行機は常に 1, 2 時間遅れるから気をつけろ」と言われていたが, 遅れることなく, むしろ 30 分早く到着した。物品の購入も電子マネーによる決済が日本よりも進んでいるため, 何をするにもスマートな対応であった。学会への若手の参加や積極的な質疑応答から見ても日本よりも勢いがあり中国は, ますます発展していくように感じた。しかし, ISORD-10 のプログラムの公表が開催 3 日前だったこともあり飛行機の予約には苦労した。

片岡 憲昭 (かたおか のりあき)

1987 年新潟県生まれ。博士(工学)。新潟大学大学院で環境放射能の研究を行う。2015 年より現職。現在は, 食品照射の研究と非破壊検査と環境放射能の業務に携わる。趣味はランニング。